

講演会 私の女性史

西岡あかね

研究グループ「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる言説と表象の研究」(科研・基盤B:19H01244 代表:西岡あかね)が主催者となって、総合文化研究所で講演会を行うのは、昨年2月に開催した映画上映会&ワークショップ「生の境界線を越えて:マグヌス・ヒルシュフェルトとアヴァンギャルド」に続き、今回で四回目になります。

これまでの研究活動やイベントでは、科研研究のメンバーに加えて、各方面の専門家をゲストとしてお招きして、アヴァンギャルド芸術における多彩なジェンダー表象に光を当ててきました。その中で、女性アヴァンギャルドの芸術実践の諸相が次第に明らかになってきましたが、なぜこれほどまでに多彩で豊かな彼女たちの活動が、従来の研究では十分に論じられてこなかったのかという、本研究の最初の立案段階で上がってきていた疑問がますます浮き彫りになってきました。そこで、今回の講演会では、女性芸術家の活動や作品がなぜ忘却され、正史から排除されてきたのか、そして、彼女たちの埋もれてしまった活動に光を当てるためには、どのような資料の整備や方法論の確立が必要なのかという、二つの問題を扱うことにしました。講師には、美術史と社会史それぞれの分野で、日本における女性史・ジェンダー史をリードしてきた研究者である、武蔵大学の香川檀さんと東京大学名誉教授の姫岡とし子さんをお迎えしました。お二人はご自身の研究を「ジェンダー史」として定義されていますが、今回は、女性(芸術家)の活動や作品、また彼女たちの歴史における存在はいかにして可視化されるのかという点に注目し、あえて「女性史」という枠組みで、ご自身の研究の歩みを語っていただくことにしました。その際、お二人の具体的な研究テーマや成果に即して、女性史研究が抱える資料的、方法論的問題について自由にお話ししていただくことで、正史のスタンダードに統合されることを拒みつつ、分離派的なセパラティズムに陥ることも避けなくてはならないという、女性史が抱えるジレンマについて考えました。また、気鋭の若手研究者である横田さやかさんに、イタリア未来派舞踊の女性ダンサーの研究を例に、女性アヴァンギャルド研究におけるオーラル・ヒストリーの方法論の応用可能性について、ダンスの再現という問題と関連付けながらコメントしていただくことで、現在の研究において、女性芸術家の活動をどのように可視化してゆくべきなのかも併せて議論しました。

香川檀さんの講演では、香川さんが1990年代初頭から97年頃まで、フリーランスで翻訳や美術ライターをしていた時期に行っていた活動が紹介されました。ダダの女性芸術家ハンナ・ヘーヒや、カンディンスキーのパートナーであった『青騎士』の女性画家ガブリエル・ミュンターの足跡を追う調査活動、日本の女性アーティストの紹介を目標として

1993年に立ち上げた「女性とアート」プロジェクトの活動、さらにネオ・ダダの女性芸術家、岸本清子の活動に関する聞き取り調査「岸本清子プロジェクト」など、香川さんの研究活動の成果から明らかになってきたのは、スタンダードな「美術史」の外側で活動する女性芸術家のアイデンティティのあり方の多様性です。虚構や記憶の歪曲をも含む、彼女たち一人一人の生の語りは総合や一般化に必ずしもなじまないものであり、その意味において「女性史」や「フェミニズム」といった包括的な視点を拒否さえしていると言えます。では、どのように彼女たちの語りをアカデミックな知に変換してゆけばよいのか、また、散逸しがちな個人の語りの資料を今後どのように保存し、整備することができるのか、女性芸術家の研究を今後進めて行く際には、この二つの問題を避けて通ることは出来ないと言香川さんは指摘しています。

姫岡とし子さんの講演では、1980年代にドイツで活発化した女性史研究の流れを受けて、市民的な女性運動の研究に姫岡さんが従事し始めたころのアカデミーの様子がまず紹介されました。ここでは、資料を残さなかった人たちの歴史をどう書くかというという問題がクローズアップされ、インタビュー研究の重要性についてお話がありました。このオーラル・ヒストリーの重要性については、その後の姫岡さんの研究との関連でも繰り返し言及がなされました。姫岡さんの研究は、東西ドイツの女性のメンタリティーの相違や、労働のジェンダー化に関わる研究、ナショナリズムとジェンダーの関係、および戦争と性暴力に関わる研究など多岐にわたりますが、これらの研究で姫岡さんが一貫して重視してきたのは、個人としての女性がジェンダー規範をどう捉えたか、また個人としての女性がジェンダーをめぐる歴史的状況とどうかかわっていたのかは、彼女たちの体験と同様、多様であったということです。従って、女性の歴史を書こうとする歴史家は、彼女たちの語りの中で主観的な意味世界やアイデンティティがどのような機能を果たしていたのかに注意を向け、彼女たちが何を語ったか以上に、彼女たちはなぜその様に語ったのかを明らかにしてゆく必要がある、と姫岡さんは強調しています。

香川さんと姫岡さんの講演は、それぞれ異なる分野における女性史の試みを紹介するものですが、お二人が共通して、主観的語りの重要性とその「学問的」解釈の難しさを強調していた点が非常に印象的でした。横田さんのコメントでは、この点を踏まえて、イタリア未来派の女性芸術家の活動が可視化されていった研究のプロセスと、現在における舞踊研究のトレンドについて紹介がありました。20世紀初頭の女性芸術家には、パフォーミングアート部門で活躍した者が多く、彼女たちの多くは言語による記録をほとんど残していません。そこで、ここでも聞き取り調査が重要になってくるのですが、未来派舞踊研究においてもまた、彼女たちの語りをどのようにアカデミックな歴史記述の中に位置づけていくかが問われているといえるでしょう。

これまでの講演会やワークショップはすべて対面で開催してきましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、今回は初めてオンライン形式での講演会開催となりました。一般の方からの事前参加申し込みも多数あり、当日は70名ほどの参加があったことで、改めて、ジェンダー史や女性史に対する関心の高まりを実感しました。また、対面式のイベント開催特有のライブ感に欠ける点は残念でしたが、遠隔地からも気軽に参加できるというオンライ

ン講演会の利点も感じました。対面形式のイベントや活動の本格的な再開のめどはたっていないませんが、今回の経験を生かす形で、オンラインなども活用しつつ、今後も本研究の成果を積極的に発信してゆきたいと思います。

日時：2021年11月27日（土）

場所：オンライン開催

司会：西岡あかね（東京外国語大学）

講師：香川檀（武蔵大学）

姫岡とし子（東京大学名誉教授）

コメンテーター：横田さやか（東京大学）

講演会 私の女性史

日時：2021年11月27日（土）

14:00～17:00

オンライン開催（事前申し込み制）参加費無料

事前申し込み締切：2021年11月15日、17時まで

（右の二次元バーコードよりご登録ください）

講演者：

香川檀（武蔵大学）

「日独、女性アーティストの足跡を追って」

姫岡とし子（東京大学名誉教授）

「私の女性史・ジェンダー史」

コメンテーター：

横田さやか（東京大学）

「未来派の女性芸術家たちのオーラル・ヒストリー：
舞踊家の事例を中心に」

主催：科学研究（基盤B）

「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる
言説と表象の研究」

<http://www.tufs.ac.jp/ag/>

共催：東京外国語大学総合文化研究所

問合せ先：a-nishioka[at]tufs.ac.jp ([at] を @ にかえて送信してください)

